様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 31 日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2012
課題番号：21520303
研究課題名（和文）
英日女性児童文学における「投稿」と「葛藤」の系譜の研究
研究課題名（英文）　A Comparative and Genealogical Study of the Women Contributors' Conflict in British and Japanese Children's Literature
研究代表者
高橋　美帆（　TAKAHASHI MIHO　）
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：70342532

研究成果の概要（和文）：英国ヴィクトリア朝児童文学は日本の明治・大正期の児童文学の発展に影響を与えた。児童文学運動の一端を担った女性作家たちのおかれた文学的・社会的情況には、英国と日本とで共通する面がみられる。すなわち、雑誌に投稿を繰り返しながら作家としての自立を目指した女性たちの、アイデンティティの確立と、それにともなう内的葛藤の問題である。本研究では、女性作家の系譜に焦点をおいた比較文学・文化の観点から、当時の家父長制社会で挑戦を続ける女性作家たちの生き方を読み解いた。

研究成果の概要（英文）：Victorian children's literature gave a significant influence on the development of Japanese children's literature in Meiji and Taisho periods.　There are some common aspects, concerning literary and social circumstances, between British and Japanese women writers, who lead the children's literature movement.　These women writers repeated contributing their works to magazines and papers, tried hard to acquire their own identity and social independence as a writer, and underwent a mental conflict associated with their identity.　From the viewpoint of comparative literature and culture in the genealogy of women writers, this study characterizes their challenge to the patriarchal society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：ヨーロッパ語圏文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：英米文学、比較文学、女性史

１．研究開始当初の背景

英国と日本の女性作家による児童文学に関する比較文学・文化的研究という観点から本課題を実施するうえで、以下のような学問的状況が見受けられた。

(1) 児童文学というジャンルが日本で確立していくのは明治時代から大正時代にかけてである。当時日本で最も多く翻訳されたのは、英国で児童文学が確立したヴィクトリア時代の作品であった。

英国で児童書が出版され始めたのが 18 世

紀後半、19 世紀に産業革命を迎えると、児童書の出版は本格的になり、子供や少年少女向けの雑誌が定期刊行物として出版されるようになった。そして 19 世紀後半、ヴィクトリア時代の絶頂期、学校教育や児童保護に関する法律等が制定されていく状況下で、英国児童文学も黄金時代を迎える。

とくに雑誌には、一般読者の参加できる投稿欄があり、あわせて懸賞作品の募集もたびたび行われた。投稿者はさらに編集者や選者に励まされ、執筆・投稿という活動に熱中していった。このような意味で、*The Girl's Own Paper* や *Atalanta* などの少女向け雑誌は、女性の教育水準を上げる役割の一端を担っていたといえよう。

しかし、こうした雑誌を支えた無名の女性投稿者たちが、やがて作家として社会で活躍していくのか、あるいは文筆をあきらめて別の道へ進むのか等、女性の社会的アイデンティティ確立の問題と絡めて、包括的にまとめた先行研究は見られなかった。

(2) 明治時代から大正時代にかけて、日本ではディケンズを代表とする英国男性作家の作品は大いに翻訳され、少年少女を対象とした小説の分野が開拓されていった。一方、女性作家の作品については、当時英国には多くの女性児童文学作家たちが活躍していたにも関わらず、ほとんど翻訳されなかった。

ただクリスティーナ・ロセッティの童謡は明治時代から紹介されており、ロセッティの作品は大正期の児童文学運動の時代に雑誌を通して広まった。当時雑誌の熱心な読者でであり投稿者であった金子みすゞをはじめ、文学少女たちに少なからず影響を与えた。

ロセッティの日本での受容、そしてロセッティとみすゞの関連についても、報告者の論考以外には本格的な先行研究はなく、ロセッティに始まる英国女性児童文学作品の日本における受容についても、先行研究はなかった。そして、雑誌や新聞に投稿して作家としての自立を目指した女性投稿者たちが、その後どのような道をたどったのかを、当時の文学・文化的背景と絡めて論じるような、総合的な研究もなかった。

このように、女性児童文学の系譜をまとめた研究はこれまで行われておらず、女性作家に焦点をおいた英国児童文学と日本児童文学との比較研究も手がけられてはいなかった。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、英国女性児童文学作品の日本における受容を明らかにしたうえで、女性作家作品群から一定の時期の文学的・文化的傾向を読み取ることで、英国と日本の児童文学がいかに成立し発展してきたのかを新たな側面から考察することであった。同時に、当時の雑誌を参照しながら、英国の女性児童文学作家たちの埋もれた作品を掘り起こす作業を進めることであった。

以下は、その具体的な内容である。

(1) 大正期の児童文学運動を牽引する数々の雑誌の「投稿欄」を見直し、読者であり投稿者である無名の女性たちに着目する。彼女たちの作品を見直しながら、そこから作家への道を歩んでいった女性作家たちの作品を掘り起こしていく。

(2) ヴィクトリア時代の児童向け雑誌に掲載された女性作家の作品群と、大正期の児童向け雑誌に掲載された女性作家による作品群を、比較文学・文化的に分析しながら、通史とアンソロジーを編纂する作業を進めていく。

(3) 執筆と投稿を繰り返す女性読者に共通してみられる、女性が作家として生きていくためのアイデンティティの確立と葛藤という問題を取り上げ、英国と日本における児童文学の成立と発展という主要テーマに引き寄せて考察していく。

３．研究の方法

基本的な研究方法は、国内外での資料・情報収集と、その整理・分析であった。部分的には、専門学会や研究会に参加して、他の研究者たちとの意見交換を通じて、内容の充実に努めた。以下は、その具体的な手順および内容である。

(1) 本研究テーマに関する図書を随時購入した。とくに、限定版で復刻している英国の児童文学関連書や資料を中心に収集した。またヴィクトリア時代の女性教育関連書もあわせて収集した。

(2) 日本の児童文学関連書や女性教育関連書については、国内の図書館にあるものを活用しながら、限定復刻版として出版され今後入手困難と思われる資料を中心に収集した。

(3) 入手困難な絶版書や、購入の困難な書籍や資料は、国立国会図書館や国内主要大学図書館等にて、閲覧のうえ情報収集に努めた。

(4) 国内で入手不可能な専門書、雑誌、資料については、授業期間外を利用して、平成 21 年度、22 年度、23 年度の３回に分けて、海外の研究機関、主に大英図書館にて収集に努めた。複写の許されない資料については、必要個所を手で写して保存に努めた。

(5) 22 年度、23 年度にわたって、英国の博物館等で開催される女性児童文学作家の回顧展に足を運び、彼女たちの現地での発掘および受容の様子を確認した。また、日本国内で開催されている日本の女性児童文学作家の回顧展にも行き、比較文学的な観点から、彼女たちの発掘と受容の状況を確認した。

(6) 収集した書籍や資料等の情報をもとに、英国と日本の女性児童文学作家たちとその作品に関する年表とアンソロジーを毎年暫定的に作成していった。その作業過程において、女性児童文学作家たちの作品群に一定期の文学的・文化的傾向を読み取ることで、英国と日本の児童文学がいかに成立し発展してきたのかを新たな面から見直した。

４．研究成果

本研究の意義は、これまで研究対象とされていなかった英国と日本における女性児童文学を通史的に概観しつつ、当時の女性作家の置かれた社会状況から、その文学・文化的傾向を新たに読み取ることにあった。また、英国と日本における児童文学の成立と発展というテーマに引き寄せて、女性児童文学を比較文学・文化的に考察することにあった。以下、その具体的な内容についてまとめる。

(1) 当時の女性作家たちの旺盛な執筆活動の背後にある社会状況を今一度洗い直し、その文学的・文化的傾向を新たに読み取った。たとえば、文芸誌や児童文学雑誌の投稿欄や懸賞への投稿を足掛かりにして、文筆活動に入る女性たちがいた。他方で、雑誌に投稿して活躍しながらも、作家としての社会的なアイデンティティの確立を許されないまま消えてしまった女性たちもいた。その残された作品を掘り起こすと同時に、首尾よく自作の出版へと至った例を分析してみると、英国と日本両方の女性作家に共通して、おおきく次のような類型が挙げられる。

① 家族（たいていは父や兄などの男性）が作家や教員などの知識人であり、その支援を受けてプロの作家になるケース
②家庭の経済的事情に迫られて懸賞等に応募して、そのまま自活する手段として作家になるケース
③中産階級出身の子女が雑誌に投稿、趣味が高じて自費出版し、それが売れてプロになるケース
④雑誌投稿をきっかけに、その雑誌の編集者となり、文筆業に就くケース
⑤雑誌投稿ののち、女性参政権運動や宗教活動などの社会運動に身を投じ、活動家として執筆を続けるケース

このほかに、匿名あるいは男性名で執筆を続け、死後その名が明らかになった女性作家たちもいる。あるいは、投稿を繰り返したもののプロにはなれず、死後何十年も経ってから、残された作品が偶然見出された例もある。

いずれにせよ、投稿欄の常連からプロの作家の道へと至ることのできる女性の数は、実際、ほんのわずかであった。

(2)英国における児童文学の成立と発展というテーマに、女性の社会進出の問題を引き寄せて考えてみると、当時の女性が雑誌に自分の作品の投稿を繰り返す行為が、そのアイデンティティの確立と直結していたことがわかる。ヴィクトリア時代の家父長的な価値観からすると、既婚婦人であり一家の主婦であることと、社会的に自立した女性作家であることは、一般的には両立しがたい。一方で、何らかの事情により、いわゆる「余りもの」になる恐れのある未婚女性たちにとって、雑誌投稿は「作家」という自立と自活の選択肢の可能性を開くものであった。雑誌投稿を繰り返すことで、彼女たちは、作家として自立できるかどうか、自分の社会的アイデンティティを確立できるかどうか、果敢に挑戦していたのである。しかしそこには常に、結婚か自立か、という内なる葛藤があった。

ただし、プロの作家になれる女性の数は非常に少なかった。それにどの分野でも書けたわけではない。たとえば当時流行していた扇情小説で成功するよりは、児童文学の分野で成功したほうが、女性として‘respectable’だと思われた。こうして、英国の児童文学は男性作家だけではなく、新進の女性作家たちの尽力によっても発展してきた。やがて‘New Woman’writers と呼ばれる作家たちが 1890 年代に出てくるまで、雑誌の投稿で鍛えられた女性たちは、児童文学を牽引していった。

(3)日本で児童文学が本格的に発展したのは大正時代であるが、明治時代にはすでに「女学雑誌」などの少女を対象にした雑誌が発刊されていた。その雑誌に寄稿していた女性作家のうち、英国児童文学との関わりで注目したいのは若松賤子（1864-96）である。彼女は英語が堪能で、アデレード・プロクタの翻案ものを寄稿したり、バーネットの『小公子』を翻訳し、日本の児童文学に寄与した。

その後、大正時代に「少女画報」や「婦人倶楽部」などの少女向け雑誌が、また「赤い鳥」や「金の船」などの児童文学雑誌が次々に発刊された。雑誌投稿を繰り返して作家を目指す少女たちの姿は、英国の文学少女たちの姿に重なる。しかしながら、「作家」は「余りもの」の選択肢ではなかった。女性はまず結婚して「母」になるように奨励された。児

童文学作品においても、母性を重視したり尊重するテーマや内容が主流であった。もし女性が作家を目指すなら、「母」と「作家」のアイデンティティの両立が求められた。内的葛藤は、その両立がかなわない場合に起こった。

(4) 米国の代表的な女性児童文学作家についても検討した。というのも、米国にはヴィクトリア時代の「家庭の天使」の価値観が 20 世紀になっても残っていたためである。こうした点から鑑みると、米国と日本の児童文学とは歩みを共有する面があると思われる。この日米比較については、当該の研究テーマの補遺として扱った。

まとめ

英日女性児童文学というテーマを扱った、これまでに先行研究の見られない本課題は、今日の文学研究においては、女性作家の系譜に焦点をおいた比較文学・文化研究の一端を担ったものといえる。また、当時の社会状況から女性作家たちの生き方を読み解いた点については、女性史研究にも位置づけられよう。

本研究により明らかになったのは、雑誌や新聞に投稿して作家としての自立を目指した女性投稿者たちの姿とその葛藤であった。また、生きていくためのアイデンティティの確立という問題も含めて、当時の女性作家のおかれた社会状況から、その文学・文化的傾向を読み取り、作品群の示すイデオロギーを明らかにすることができた。

本研究の成果を基礎にして、19 世紀から 20 世紀以降の女性児童文学を概観すると、さらなる通史的研究が進められると推察される。同時に、英国児童文学が翻訳されて日本の児童文学に影響を与えたように、今度は日本児童文学が英国で紹介されて影響を与えた例の検証など、関連研究への発展が見込まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① TAKAHASHI Miho, ‘The Nun as a Theme: A Genealogy of Victorian Poetry’,『英文学論集』、第 50 号、2011、pp.41-71、査読有.
② 髙橋美帆、「ヴィクトリア朝文学における＜修道女＞のテーマ―女性詩人の「連歌」をめぐる一考察」、『天理大学学報』、第 62 号、2011、pp1-31、査読有.

〔学会発表〕（計 3 件）

① TAKAHASHI Miho, ‘Reconsideration of Hopkins before the Silver Anniversary’, 24th Gerard Manley Hopkins International Conference, 2011.07.28, Newbridge College, Ireland.
② TAKAHASHI Miho, ‘A Genealogy of Victorian Sonnets’, 23rd Gerard Manley Hopkins International Conference, 2010.07.28, Newbridge College, Ireland.
③ TAKAHASHI Miho, ‘Hopkins and Ireland’, 22nd Gerard Manley Hopkins International Conference, 2009.07.29, Monastereven, Ireland.

〔図書〕（計 2 件）

① 髙橋美帆、英宝社、『幻想の修道女―ブラウニング、ロセッティ、ホプキンズ』、2011、pp. 202.
② 髙橋美帆、他、現代思潮新社、『ベケットの友情』、2011、pp.161.

６．研究組織
(1)研究代表者

髙橋　美帆（TAKAHASHI MIHO）
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：70342532